千葉県文化財センター調査報告第228集

芝山町菱田梅ノ木遺跡

－菱田梅ノ木地先宅地造成に伴う埋蔵文化財報告書－

1993

新東京国際空港公団
財団法人　千葉県文化財センター

芝山町菱田梅ノ木遺跡

ひしだうめのき

－菱田梅ノ木地先宅地造成に伴う埋蔵文化財報告書－

1993

新東京国際空港公団
財団法人　千葉県文化財センター

序　　文

千葉県北東部の印旛沼の東に広がる下総台地は、古来より豊かな自然環境に恵まれ、先人達の活動や生活の跡が歴史的・文化的遺産として数多く残されております。

一方では、成田市、芝山町、多古町にまたがって新東京国際空港が建設されるにおよび、日本の新しい空の玄関としての役割を担いつつ以前にも増して著しい変貌を遂げつつあります。

このため、今では空港利用者、貨物取扱量は増大の一途をたどり、第２ターミナルビルや滑走路建設等のさらなる拡充がせまられております。

新東京国際空港公団では空港関連施設建設の進捗に伴い、新たに騒音区域の対象となる地区のうち、芝山町中郷地区の住民の集団移転先として菱田地区に宅地造成を計画しました。

千葉県教育委員会では、計画予定地内に所在する遺跡の取扱いについて新東京国際空港公団と慎重に協議を重ねた結果、やむを得ず事前に発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることで協議が整い、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することになりました。

発掘調査の結果、先土器時代、縄文時代早期と古墳時代後期の遺物を包蔵する遺跡であることが明らかになりました。

このたび整理作業も終了し、その成果を「菱田梅ノ木遺跡」として刊行するはこびとなりました。本報告書が学術資料としてはもとより、文化財保護の普及資料として広く一般の方々に活用されることを願っております。

終わりに、発掘調査から報告書刊行まで種々御指導いただいた千葉県教育委員会をはじめ、新東京国際空港公団、千葉県企画部空港対策課、芝山町整備課ならびに地元関係者各位に御礼申し上げるとともに、発掘調査や整理作業に携われた調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成５年３月

財団法人千葉県文化財センター
理　事　長　　奥　山　　浩

凡　　例

1　本書は、山武郡芝山町菱田字梅ノ木４７１他に位置する、菱田梅ノ木遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。遺跡コードは、４０９－０２７である。

2　発掘調査は、空港関連事業に伴う事前調査として、新東京国際空港公団との委託契約に基づいて、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

3　発掘調査は、平成３年６月１日から平成３年８月３１日まで、調査部長　天野　努、部長補佐　阪田正一、班長　宮　重行の指導のもとで班長代理　岡田誠造、主任技師　上守秀明、技師　四柳　隆、半澤幹雄が行った。

4　整理作業および報告書の作成作業は、平成４年４月１日から平成４年６月３０日まで調査部長　天野　努、部長補佐　深澤克友、班長　三浦和信の指導のもとで班長代理　岡田誠造が行った。

5　本書で使用した地形図は、国土地理院著作・発行の1／25,000新東京国際空港および多古を使用した。

6　本書で使用した方位は、公共座標に基づき座標北を使用している。

7　発掘調査から報告書刊行にいたるまで、下記諸機関、関係者の御指導、御協力をいただきました。記して深く謝意を表する次第です。

千葉県教育庁生涯学習部文化課、新東京国際空港公団、千葉県企画部空港対策課、芝山町整備課、小川総一郎。

目　　次

序　文
凡　例
Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅱ　調査の方法 …… 1
Ⅲ　調査の成果 …… 3
(1)　先土器時代 …… 3
(2)　縄文時代 …… 5
(3)　古墳時代 …… 20
Ⅳ　まとめ …… 22

挿図目次

第１図　菱田梅ノ木遺跡と周辺の遺跡位置図
第２図　グリッド配置図
第３図　先土器時代出土遺物
第４図　先土器時代遺物出土状況図
第５図　縄文時代遺構実測図
第６図　縄文土器出土状況図
第７図　縄文土器拓影図（1）
第８図　縄文土器拓影図（2）
第９図　縄文土器拓影図（3）
第10図　縄文穿孔土器拓影図
第11図　縄文土製品拓影図
第12図　縄文石器実測図（1）
第13図　縄文石器実測図（2）
第14図　古墳時代遺物実測図
第15図　８Ｃグリッド石器出土状況図

表 目 次

第１表　土製品計測表
第２表　縄文時代石器属性表

図版目次

図版１　遺跡周辺航空写真
図版２　先土器時代遺物出土状況
　　縄文時代遺構
図版３　縄文土器
図版４　縄文土器
図版５　縄文土器
図版６　先土器時代遺物
　　縄文時代遺物
図版７　縄文時代石器

Ⅰ　遺跡の位置と環境

菱田梅ノ木遺跡(1)は、栗山川水系を構成する河川の一つである高谷川の上流部に位置し、高谷川へ注ぐ一支流の左岸の標高40ｍから42ｍの台地上に位置する。遺跡は、その小河川の水源地に近く、台地下の水田との比高差は約20ｍを測る。

高谷川は、南流して多古町で栗山川と合流し、九十九里海岸から太平洋へ注ぎ込んでいる。

遺跡の北部には、天神峰、東峰などに水源地をもち、利根川へ合流する大須賀川、尾羽根川、取香川が北流し、北西部には根木名、取香に水源地をもつ根木名川が成田市を経て利根川へ注いでいる。

このように遺跡は、太平洋側水系と利根川側水系との分水嶺に近い、太平洋側に開口した台地の最奥部に位置している。

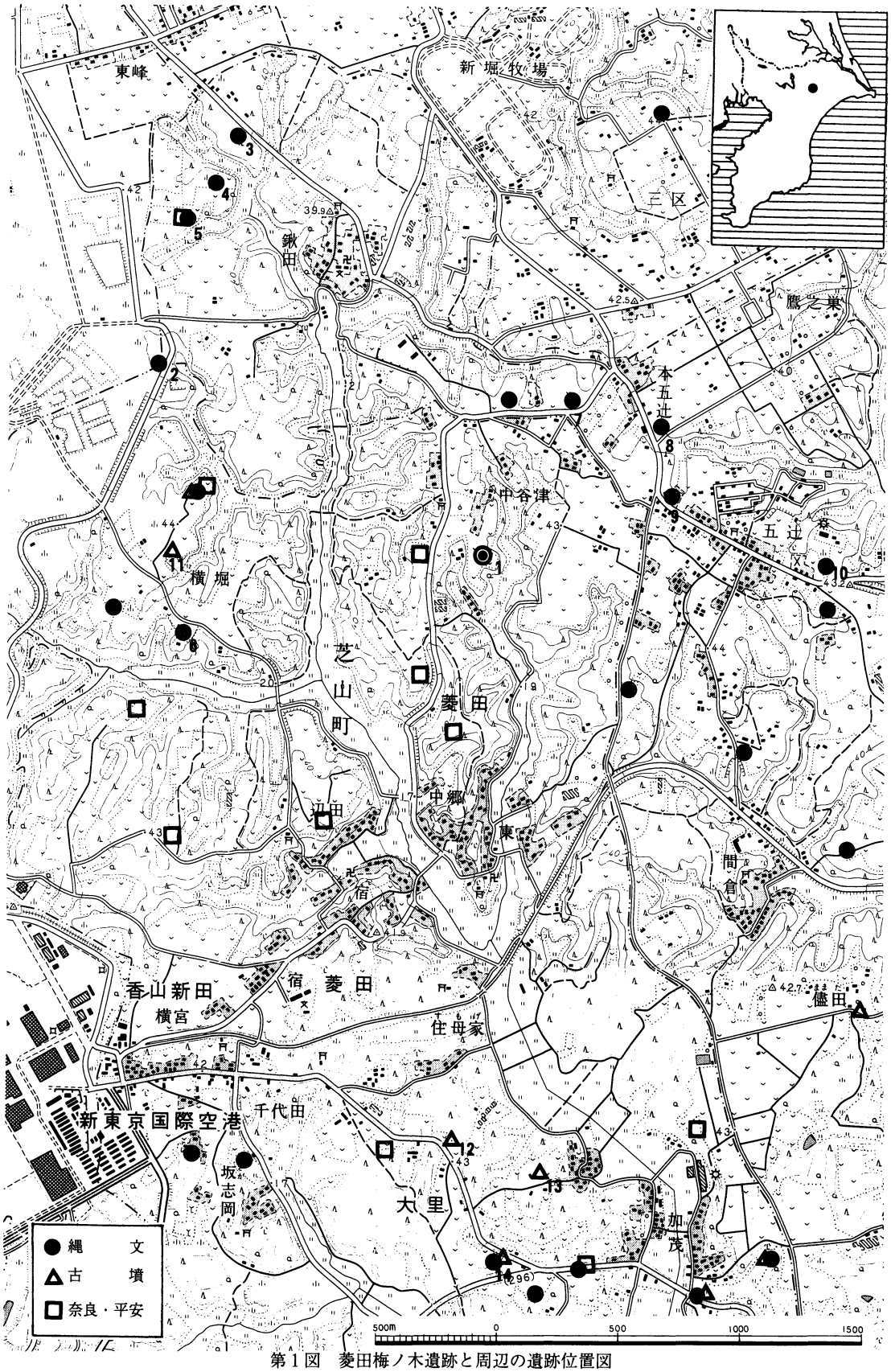
遺跡周辺の地形は、小河川によって樹枝状に開析されて複雑な地形を形成しており、遺跡の所在する台地は、支谷が南から台地の東側と西側へ入り込んでおり、この台地を際だたせている。この台地の東側と西側ではかなり急峻な斜面となっており、西側の谷頭部では比較的ゆるやかな地形を形成している。

本遺跡の周辺には多くの時期にわたって遺跡が確認されているが、縄文時代早期の遺物を含む遺跡は、空港予定地内に所在する空港No.10遺跡(2) No.11遺跡(3) No.12遺跡(4) No.16遺跡(5)等があり、当文化財センターで発掘調査を実施している。他には金沢台遺跡(6) 大ヨロⅠ遺跡(7) 鷹ノ巣遺跡(8) 五辻遺跡(9) 赤坂遺跡(10) 等が知られている。これらの遺跡のうち空港No.11遺跡では菱田梅ノ木遺跡にみられる遺物と同時期の縄文時代早期の撚糸文系の土器群が検出されており、No.60遺跡でも同時期の土器群がまとまって検出されている。また、空港No.７遺跡B地点とNo.60遺跡では井草式期の住居跡も検出されており、空港No.60遺跡では７例が知られている。

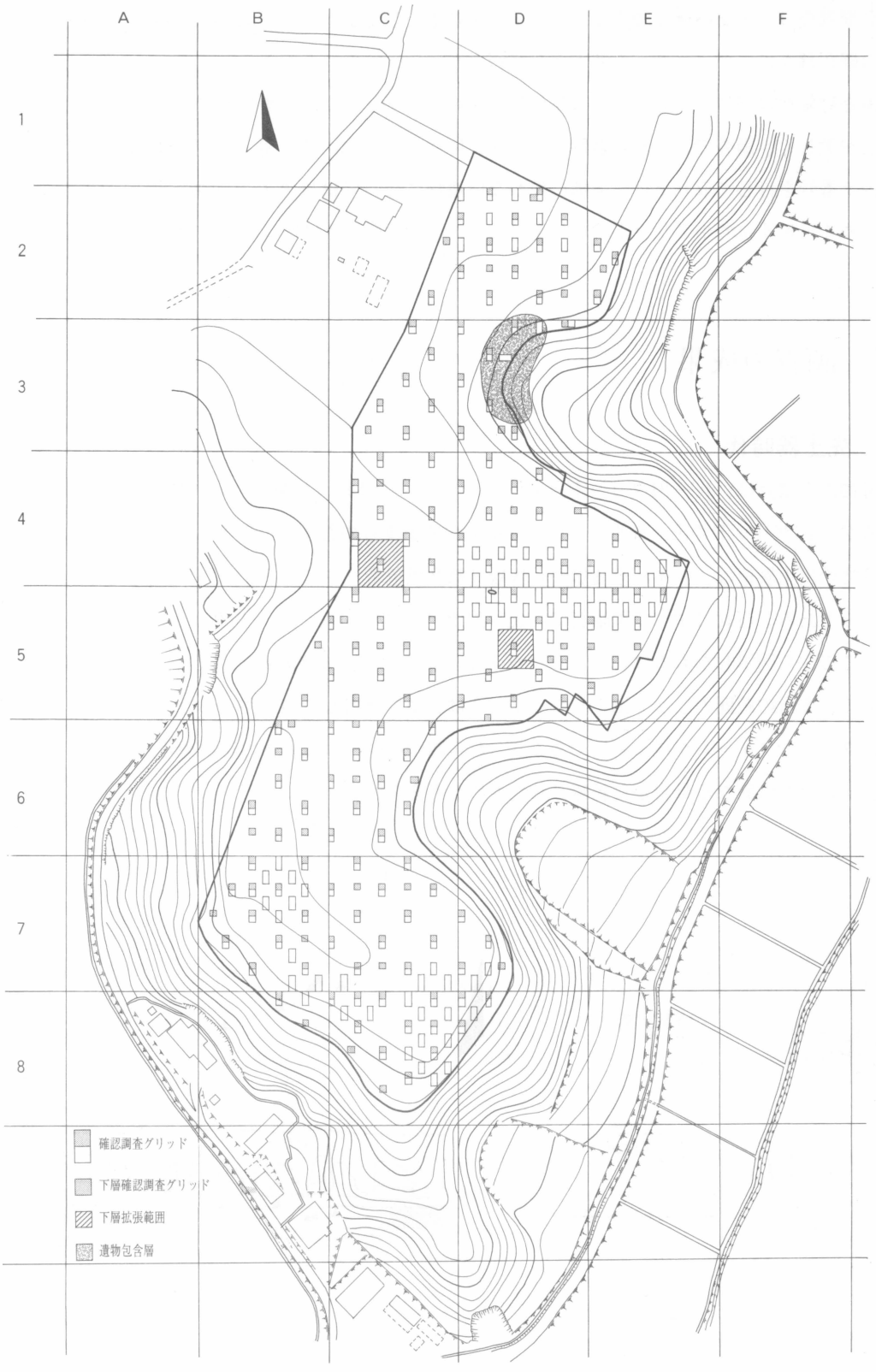
古墳時代の遺跡では安戸台遺跡(11) 大里田辺台古墳群(12) 田辺野東古墳群(13) 宿遺跡(14) などが知られており、安戸台遺跡と宿遺跡は古墳時代後期の遺物を含む遺跡である。

Ⅱ　調査の方法

調査は、公共座標を基に設定した40ｍ×40ｍを一つの大グリッドとし、調査対象範囲の北西端から東へアルファベットでA～Fとし、北から南へ算用数字で１～９で表し、各々の大グリッドをこの組み合わせで表記した。大グリッドはさらに４ｍ×４ｍの小グリッドに百分割し、北西端を00とし北東端を09として南へ00～90まで、南東端を99とするように分割した。



第1図　菱田梅ノ木遺跡と周辺の遺跡位置図



第2図　グリッド配置図

発掘調査は、上層の確認調査は２ｍ×４ｍを基本として小グリッドの西側部分を調査し、下層の確認調査は、２ｍ×２ｍを基本として行った。

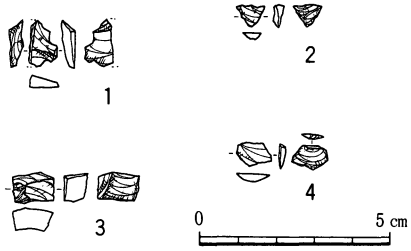
調査対象地は畑地で、北半部分は耕作時の深耕ロータリーによる攪乱とゴボウのトレンチャーの痕が激しく、調査でえられた遺物は、遺構に伴うものについては通し番号を付すか、グリッド内で番号を付して取り上げ、遺構に伴わない遺物についてはほとんどが攪乱層中の出土であるため４ｍ×４ｍの小グリッドの名称を付して、一括で取り上げた。

Ⅲ　調査の成果

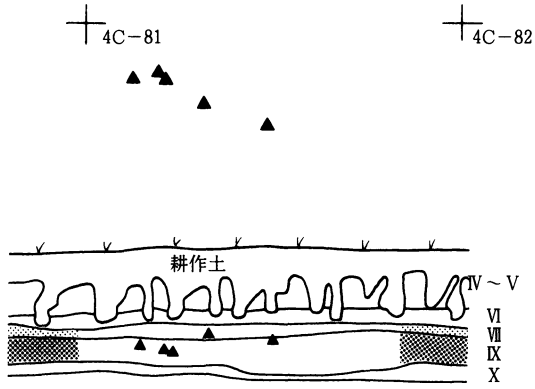
(1)　先土器時代

遺物出土地点は、4C－81グリッドと5D－45グリッドの２地点である。いずれも台地平坦部であるが、4Cグリッドの出土地点は、南から湾入する小支谷の谷頭に位置する。

遺物の出土層位は、いずれもⅦ層からⅨ層（第２黒色帯）中である。出土遺物の組成は、砕片のみである。石材はすべて黒曜石で、4C－81グリッドで５点、5D－45グリッドで１点出土した。このうち図示したものは4C－81グリッド出土の遺物で、ほぼ直線的に５点が並んだような状態で、２ｍの範囲のなかで出土した。１～３は、剥片を剥した後にさらに砕割されている。４はプラットフォームが残る剥片である。これら四つの砕片は混入物の状況や色調から１と２、３、４の三つの異なる母岩から剥離されたものと考えられる。



第３図　先土器時代出土遺物

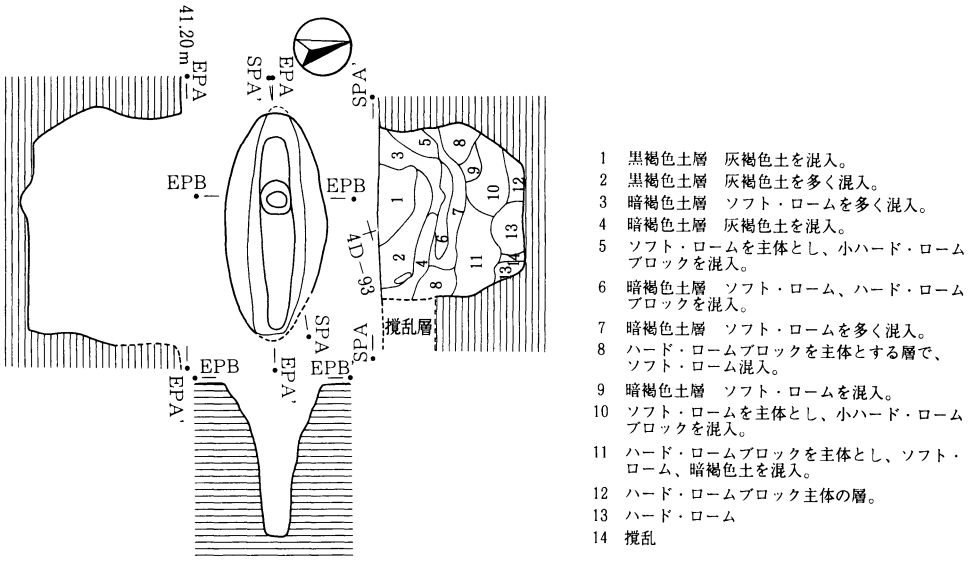


第４図　先土器時代遺物出土状況

(2) 縄文時代

1．遺　構

縄文時代の遺構は、陥穴１基が4D－71グリッドで検出されたのみで、他の遺構の検出は皆無であった。構築位置は台地平坦部で、確認面はソフトローム層上面である。長軸方向を東北東にとり、長軸上端部で推定130㎝、下端部で100㎝、短軸上端部で55㎝、下端部で18㎝で、深さは確認面から80㎝を測る。長軸方向の下半の一方はややオーバーハングした形態をとる。断面形は、上部が開き下半がすぼまったＹ字状を呈する。底面はほぼ平坦であるが小ピット状の窪みを一つ有する。遺物は、縄文土器（早期）が覆土中層から数点出土しているが、細片であり、図示しえなかった。



第５図　縄文時代遺構実測図

2．縄文土器

本遺跡より出土した縄文時代の遺物は、確認調査グリッド中から出土したものおよび調査区北側の東西から谷が入り込んだ台地の基部の、東側の谷部にかかる斜面で検出された遺物包含層（SX－001と呼称）からの出土のものである。これらの遺物に伴う遺構はまったく検出されなかった。検出した遺物のなかには二次的に被熱したと考えられる遺物が含まれることや、こうした遺構が検出されない遺跡の存在することは、縄文時代早期の遺跡のあり方とも関連したこととして捉えることもできよう。出土遺物の内訳は土器、土製品、石器、円礫などであり、土器は約3800点、土製品5点、石器類148点を数える。このうち土器は、早期の撚糸文系が圧倒的多数を占めており、本遺跡の主体をなすものである。なかでも夏島式期の土器が量的にはもっ

第6図　縄文土器出土状況図

とも多く出土している。他は田戸下層式および前期に由来する土器がわずかに出土したにすぎない。

遺物の出土状況は、4D，4E、5D、5Eグリッドと8C、8Dグリッドおよび3Dグリッドの斜面部でまとまりをみせる他は散漫な分布の傾向を示しており、東側の谷部側に面した台地上に遺物が集中することが認められる(第6図)。また、8Cグリッドでは後述するように円礫を含む石器類がソフトローム層直上の層から出土している。なお、4D，4E，5D，5Eグリッドの遺物の集中が認められる範囲については耕作による攪乱が著しく、包含層としてはとらえられない状況であったので確認グリッドを密にして調査するにとどめた。

土器は便宜上下記のとおり分類し、記載する。

Ⅰ群土器　早期撚糸文系土器を一括する。

井草Ⅰ式から稲荷台式にいたる各型式の土器が出土している。本遺跡出土の土器には推定復元できる土器がほとんど存在しないことや接合資料に乏しいなどのほかに破片を含めて底部の検出が僅少であることなどが指摘できる。なお、挿図中に番号のみ付した土器は、遺物包含層としてとらえた資料であり、他はグリッド出土遺物である。

1類　井草式土器（第7図1～36、図版3）

1種　押圧縄文が施文されるもの

a　口端に縦位の押圧縄文が施されるもの（1～4）

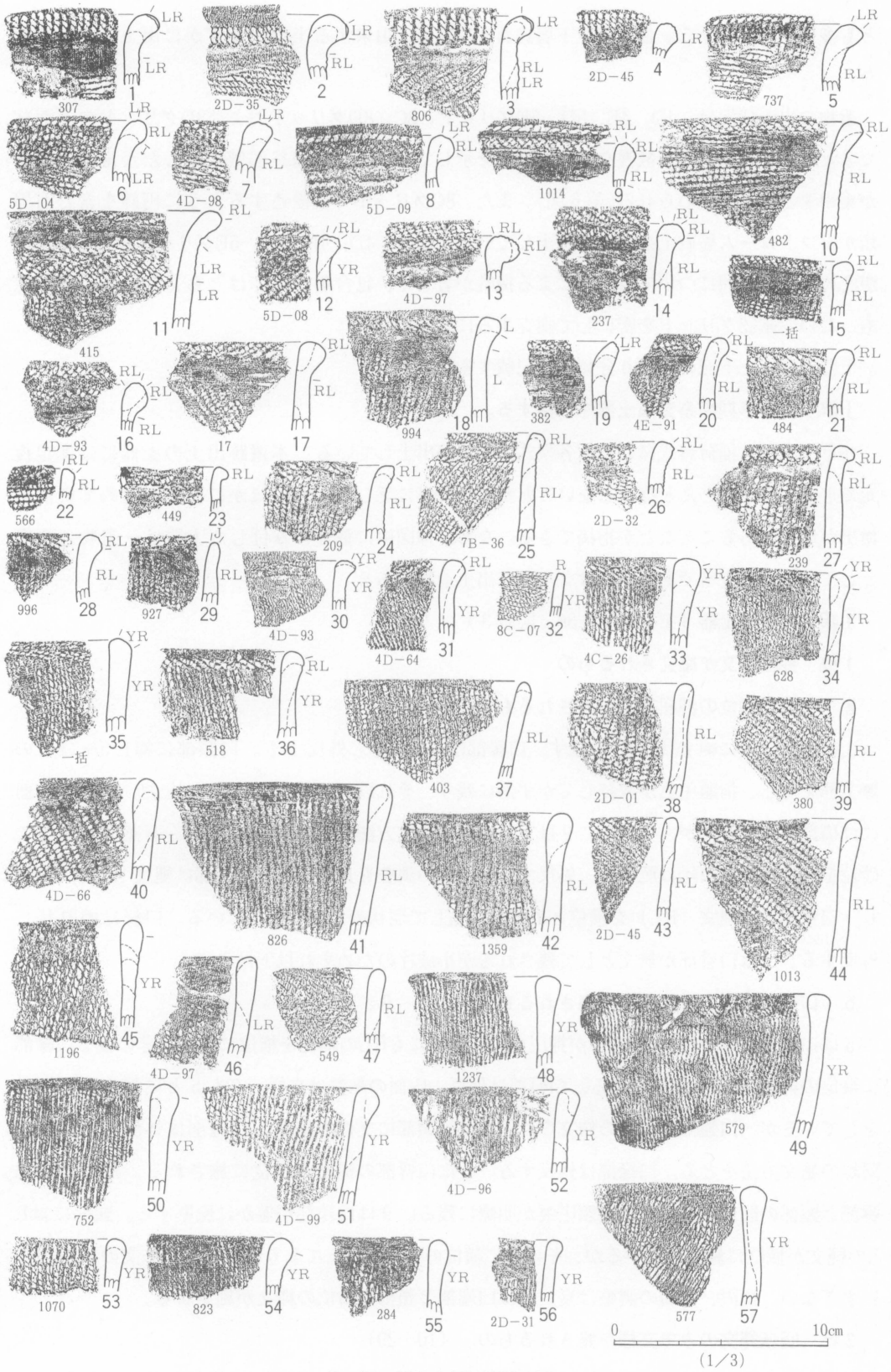
1は口端に密に縄文（LR）を施す。口縁部はやや肥厚し外反する。口頸部に幅1.5cmほどの無文部を有し、指頭圧痕が連続してかすかに残り、それ以下は横位の縄文を施す。口端の内面には横位のナデ整形がみられる。2は1と同様の施文方法で文様が施される。石英・長石等の砂粒を多く含む。口縁は肥厚し、外反する。内面の調整も良い。3は口端部は縄文（LR）を施し、口頸部には縄文（RL）を横位と縦位から施して羽状の効果を出している。口縁は肥厚し、外反する。4は口唇部が無文として残されるが小破片のためそれ以下は未詳。

b　口端に横位の押圧縄文が施されるもの。（5～9、12）

5は口端に一条の縄文（LR）が押圧され、頸部にもRLの縄文を横位に施す。その後で口縁部に縦位の縄文（RL）が施される。口唇部は外反。内面の調整は良好。6も5と同様の文様構成をしているが、口頸部の縦位の施文を行った後に頸部に文様を施す。口縁部は外反。7は5と同様の施文方法をとる。口縁部は外反する。8は口唇部の縄文が斜位に施される。肥厚した口唇部と頸部の間には連続して指頭圧痕が明瞭に残る。9は口縁部が僅かに肥厚する。頸部にはRLの縄文が横位に施されているが、その上に横位のナデを加えており、部分的に施文の痕が残るにすぎない。焼成、内面の調整は良。12は口端部と頸部に斜位の縄文が施される。

2種　回転縄文のみで文様が施されるもの。（10～29）

10は口端部には斜位に、頸部には横位に縄文（RL）を施し、頸部には横位のナデを加える。



第7図　縄文土器拓影図（1）

内面の調整は良好で、焼成も良である。11は口端部ではRL，頸部ではLRの縄文を斜位と縦位に施して羽状の効果をだしている。口縁部は外反する。13は口端部に2段にRLの縄文が施される。口縁部は肥厚し、頸部との間に指頭圧痕に伴う爪の痕跡が残る。14は、口端部にRLとLRの縄文が2段に施され、口頸部は器面が荒れて観察しにくい点もあるが無文として残されている。15は器厚が5㎜とやや薄手の土器で、口端部と口頸部に縄文が施される。頸部の施文は浅く、施文後に横位のナデを加えており、文様が部分的にすり消されている。16は同一原体と考えられるLRの縄文を2段、口端部に施している。頸部にもLRの縄文を施す。口縁部は肥厚し、僅かに外反する。17は口縁部が肥厚しわずかに外反する。頸部の施文は浅く、ナデによる整形により部分的に消えている。18は縄文（Lか？）を浅く密に施す。口縁部は外反し、口端部は調整により平坦な面を形成している。19は口端部に縄文を施す。口頸部は調整が加えられており無文。口縁部は外反する。20は縄文が口端部には斜位に、口頸部には縦位に浅く施される。口縁部がわずかに外反する。21は口頸部に縄文が浅く施され、ナデが加えられて部分的に残っているにすぎない。22は小破片で口端部と口頸部に縄文を施す。口縁部は外削ぎ状を呈し、やや薄手の土器である。23は肥厚した口縁部に縄文が施され、口端直下には指頭圧痕が残る。器厚は4㎜と薄手で小型の土器か。24～29は25が斜位の縄文が頸部に施される他は縦位の縄文である。

3種　縄文と撚糸文が施文されるもの。（31、36）

31は口端部に縄文（RL）を斜位に施し、頸部にはRの撚糸文を縦位に施す。口唇部がわずかに外反する。36は口端部に縄文（RL）を施し、頸部に撚糸（R）を施す。

4種　撚糸文のみ施されるもの。（30,32～35）

30は肥厚した口縁部にRの撚糸文を2条横位に施し、頸部にも細かくて密な撚糸（R）を施す。32も口端と頸部に細かくて密な撚糸文（R）を施す。器厚が4㎜と薄手で小型の土器の破片である。32～35も撚糸はすべてRが施されている。33,34は口縁部がわずかに肥厚する。

2類　夏島式土器（第7．8図、図版4．5）

1種　縄文が施されるもの（37～47、58）

37は縄文（RL）を縦位に密に施す。口縁部は丸頭状を呈し、胎土に砂粒を多く混入する。内面は横位のナデが加えられる。38はやや粒の大きな縄文（RL）を縦位に施す。口縁部は丸頭状を呈する。器面内面は荒れてザラついている。39、40は縄文（RL）を斜位に施す。ともに口縁部は丸頭状で、40は口縁部から1㎝ほど無文部を残した下部から施文している。

41は口縁部が肥厚し、口端部にナデが施される。胎土に砂粒を多く混入し、赤橙色の粒子も混入している。42は縄文を全体的には浅く施し、口縁部が肥厚する。口端部は光沢を放つほどにナデが加えられている。43は縄文（RL）を斜位に施す。口端部は平坦に整形された、角頭状を呈し、口端部から1㎝ほど下がった部位がわずかにくびれている。器厚は3～4㎜とやや薄手で小形の土器と考えられる。44も縄文（RL）を斜位に施し、口縁部がわずかに肥厚する。胎土

に赤橙色の粒子を混入する。46は口縁部に2㎝ほど無文部を残した下位から縄文（LR）をやや粗に浅く施す。器面が荒れており判然としないが一応ここでは夏島式に分類しておく。47は縄文（RL）を回転方向を変えて施し、羽状の効果を出している。

2種　撚糸文が施文されるもの

撚糸はすべてRが施されており、細かくて密なものや、粗に施されるものなどがある。

a　口縁部が肥厚するもの（45,48～57）

45は撚糸を斜位に施す。口縁部は内面では光沢を放つほどに調整が加えられる。48は細くて密な撚糸を縦位に施す。口縁部の内面には丁寧なナデを加える。焼成は良好で、黒褐色を呈する。49は撚糸の原体（幅16㎜、8～9条）を縦位に不規則に施文。器面は荒れており、施文後に部分的に縦位のナデを加える。また、49,51,52の胎土表面には軽石状の小さな気泡の孔が多数認められる。ともに淡い茶褐色を呈する土器である。50は細かい撚糸を少し条間をあけて施す。内面は口縁下まで横位のナデが加えられている。51,52,53はやや粒の大きな原体を施文している。54は撚りのもどり気味の原体で施文。器面の整形は良好で、横位の調整を施す。55は不規則に撚糸が施される。56は口縁から約1㎝の無文部を残した下部から撚糸が施される。器厚は4㎜とやや薄手である。57は斜位に撚糸を施す。口端部にはナデを加えるが、内面は荒れてザラついている。

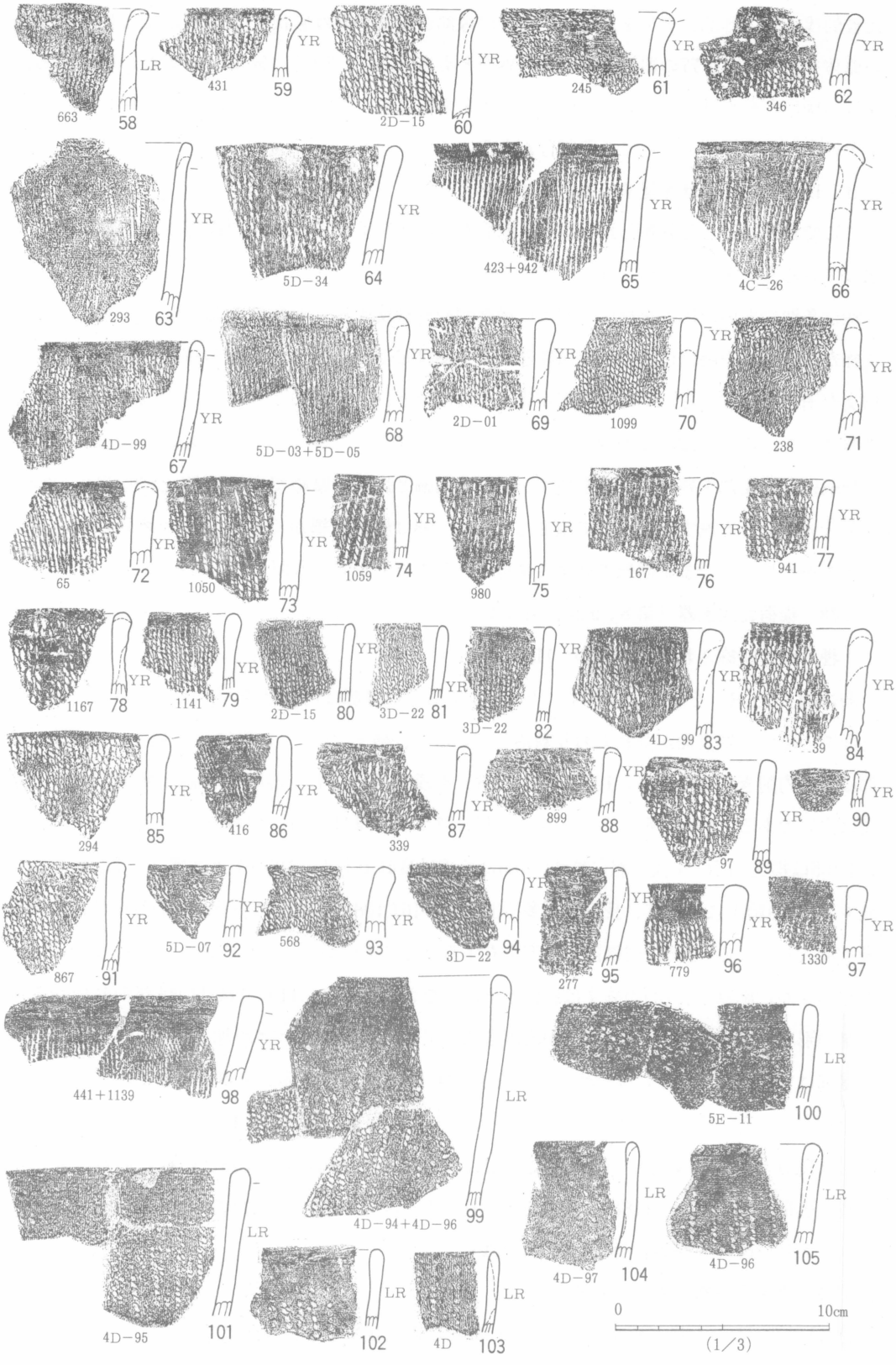
b　口縁部が外反するもの（58～63）

58は口縁部に指頭圧痕が連続して残り、胎土に砂粒を多く混入する。口縁部内面は横位の調整が加えられる。59はやや条間のあいた撚糸を施し、口縁部が肥厚する。60は口縁部がわずかに外反する。口端部が二次的被熱によってもろくなって剥落しているが、内面は全面が横位のナデで整形されている。61は撚糸を施した後でナデを加えて、文様が部分的に消されている。62は口縁部に無文部を20㎜ほど残した下位から縦位に撚糸を施す。器面の整形は粗く凸凹している。口縁は角頭状を呈する。63は撚糸を回転させずに押圧したまま引いて文様を施したもので、施文後に縦位のケズリに近い調整を施しており、施文が消えかかっている。胎土に砂粒を多く混入する。

c　口縁部が丸頭状を呈するもの（64～88）

ここでとりあげた資料の原体はすべてRの撚りで施文されており、当遺跡においてはLは存在しないようである。条間の粗密や、施文の深浅、撚りのもどりかけたものなどが含まれる。

64は撚糸を縦位に施す。胎土に細砂粒を多く混入し、器面は内外面とも荒れている。65は撚糸を縦位に施文後に器面にわずかに光沢を有するほどにナデが加えられており、口縁部にも丁寧な調整がなされる。胎土に赤橙色の粒子（パミスか）を混入する。焼成は良好である。66はやや条間のあいた撚糸を施す。口端部にナデを加える。67は口端部及び口縁部の内面にナデを加える。胎土に赤橙色の粒子を混入する。施文は浅いところと深い施文とがある。68の施文は



第8図　縄文土器拓影図（2）

比較的浅い。口唇部にナデを加える。71は口縁部が尖りぎみの形状を呈する。72は撚りのゆるい原体を深く施文。77の器面の調整は内外面とも良好。78、79は口縁部がわずかに肥厚する。83は口縁部がやや外反している。86は細い撚糸を密にやや斜位に施す。88は施文後の縦方向のナデによって文様が消されている部分がある。

d　口縁部が角頭状を呈するもの（89～98）

ここで角頭状として分類した土器は、断面が角頭状を呈するものと口端部が調整によって角張っているものを含む。施文はすべてRである。

89は条間のあいた撚糸を施す。90は口縁部がやや外反する。小形の土器の破片である。91は文様が縦位とやや斜位に施され、口端部から7㎜ほど下位に幅3㎜ほどの擦痕様の痕跡があり施文が消えかけている。93は口端部が光沢を放つほどにナデが加えられ、内面は横位のナデで調整されている。95は断面が内側へゆるいカーブを描き、口端部は平坦である。96は口端部から15㎜ほど無文部を残して撚糸を施す。器厚が12㎜と比較的厚めである。胎土に赤橙色の粒子を混入する。97も無文部を残して施文している。98は施文が細かく密な部分と条間のあいた部分と撚糸を押圧したまま回転させずに文様を付した部分が同一器面上に認められる

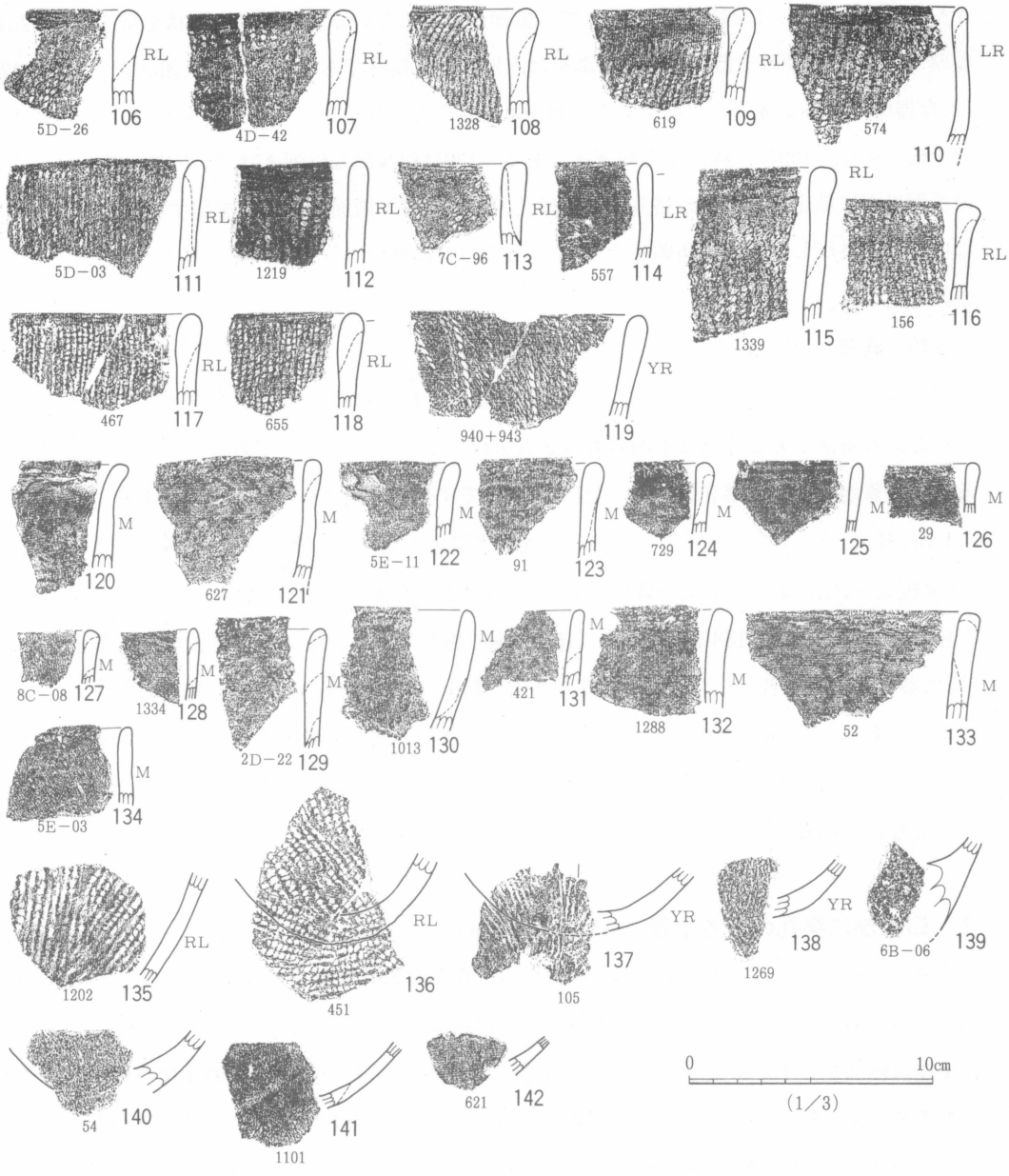
3類　稲荷台式土器（第8．9図、図版4．5）

1種　縄文が施されるもの（99～118）

99は縄文（LR）を施す。施文後にナデを加える。口縁部は円頭状を呈する。100は口縁部の外面をのぞいて器表面が荒れており剥落しているが、縄文（LR）を粗に浅く施す。101は口縁部はやや内削ぎ状を呈する。102は縄文（LR）を浅く粗に施す。器厚は5㎜と薄手である。焼成は良好である。103は縄文（LR）を浅く粗に施す。器厚は4㎜で口縁部は内削状を呈する。104,105は縄文（LR）を浅く粗に施す。105は焼成は良好である。106～108は縄文（RL）を浅く施す。106の胎土には石英、長石等を多く混入し、107,108には胎土に石英、長石等の他に雲母を多く混入している。106は口縁部に光沢を有するほどにナデが加えられている。108、109は口縁部がわずかに肥厚し、109の施文は斜位と縦位になされている。110、114は口縁部の断面が尖り気味の形状を呈する。111は口縁部が内削ぎ状を呈し、内面にはナデが加えられている。112は口縁部は丸頭状で、胎土に赤橙色の粒子を混入する。113は口縁部が角頭状を呈し、口端部は光沢を有するほどにナデが加えられている。115,116は口縁部が肥厚し、115は縄文（RL）、116は縄文（RL）を施している。117,は縄文（RL）を施し、胎土には107,108と同様に石英、長石等の他に雲母を混入する。118は胎土に石英、長石等を混入する。117,118の内面にはナデ調整が施されており、砂粒等が器表面に浮いていない。

2種　撚糸文が施文されるもの。

119は撚糸（R）を粗に施文している。口縁部は丸頭状を呈し、内面は丁寧なナデによる調整が加えられている。



第９図　縄文土器拓影図（3）

４類　無文土器（第９図、図版５）

120は外面に横位、縦位のナデを加え、口縁部には、指頭による圧痕が残り凸凹しており、内面は横位のナデで調整されている。器形は口縁部が外反し、角頭状を呈する。121は口縁部に指頭による圧痕が残り角頭状。断面はゆるいS字状を呈する。122は口縁部がわずかに外反し、断面は内削ぎ状を呈する。外面は凸凹している。123は土器片の下部に二条の縦位の施文とも考えられる条痕が残るが、ここでは無文土器として分類しておく。口縁部は丸頭状を呈する。124は

やや薄手の土器で、口縁部外面が荒れて、器面が剥落している。断面は丸頭状を呈する。125は器厚が3.5㎜と薄手の土器で、器面の調整は内外面とも良好である。断面は丸頭状を呈する。126,127は器厚が4㎜と薄手の土器である。断面はともに丸頭状を呈する。128も器厚が3㎜と薄手の土器である。129は口縁部が内削ぎ状である。130は口縁部が外削ぎ状で、内傾している。131は器面外面に粘土の接合痕が残り、器面は凸凹している。断面は角頭状を呈する。132はわずかに口縁部が外反し、断面は角頭状を呈する。133,134は横位のナデで調整しており、断面形は角頭状を呈する。

5類　底部（135～142）

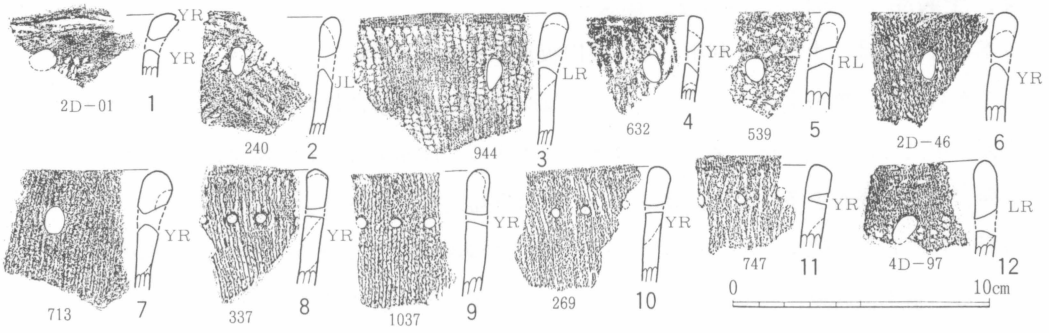
底部は27点が出土したが、その内訳は、縄文が施されるもの5点、撚糸文が施されるもの13点、器面の剥落が著しく施文不明のもの9点を数える。すべて破片であり、その形態を把握することは難かしいが、第9図に示した139を除いてすべて丸底状を呈するようである。

135は縄文（RL）を密に施している。内面は黒褐色を呈する。胎土に砂粒を多く混入する。136は縄文（RL）を施す丸底の底部である。137は撚糸を押圧したまま回転させずに引いて文様を施したものである。138は細い撚糸（R）を深く施しており、施文が交錯している部分がある。139は器面の剥落が著しい、尖底の一部である。140～142は丸底の一部で、施文はなされていないようである。141は器厚が3㎜と薄手で、小形の土器の底部と考えられる。器面は剥落しており、スポンジ状の小孔が多く認められる。142も器厚が2～3㎜と薄手で、小形の土器の底部の一部と考えられる。

3．口縁部に穿孔のある土器（第10図、図版6）

本遺跡からは合計17点の出土をみた。17点の穿孔の内訳は焼成前の穿孔が4点、焼成後の穿孔が13点である。そのうち、口縁部の遺存する12点について図示した。

1は口縁部がわずかに肥厚、外反し、口唇部には撚糸（R）の横位回転の文様が施され、頸部にも撚糸（R）を斜位に施す。穿孔は焼成後に両面から加えられている。2は口縁が内削ぎ状を呈し、縄文（L）を回転方向を変えて斜位に施し、羽状の効果を出している。焼成後の穿孔である。3は口縁がわずかに肥厚した丸頭状で、縄文（LR）を口唇部から密に縦位に施している。口唇部には丁寧な調整が施される。穿孔は焼成後である。4は器面が荒れてザラついているが、撚糸（R）を施す。口縁部は角頭状を呈する。焼成後の穿孔である。5は口縁部が外反する。縄文（RL）を施す。口唇から口縁部の内側にかけて丁寧な調整を加える。穿孔は焼成後で、器面に対して30度ほど左へ傾いた上方から加えられている。6は細かく密な撚糸（R）を縦位に施す。穿孔は焼成後に主として表面から行われており、実際の穿孔は1.5㎜×3㎜と小さい。7は口縁部が肥厚する。細かく密な撚糸（R）を縦位に施す。口縁部の内面に丁寧な調整を加える。穿孔は焼成後であり、両面からの穿孔が試みられているが、内面の穿孔痕は実際の穿孔部から右下



第10図　縄文穿孔土器拓影図

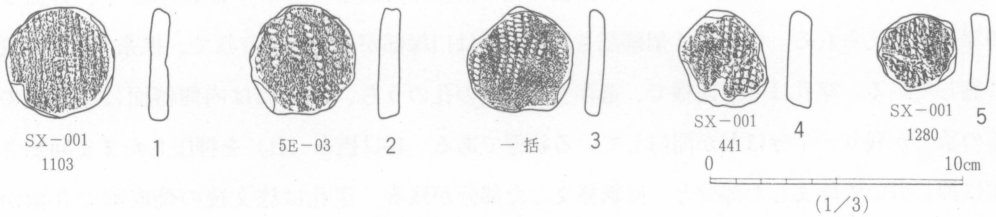
へややずれた位置にあって、貫通していない。8は縦位の撚糸（R）が施されており、施文後の焼成前に穿孔されている。穿孔は口縁と平行してほぼ水平になされ、穿孔部は工具を回転させて調整したかのように滑らかである。内面の孔の直径は外面よりもわずかに小さく、外面からの穿孔と考えられる。穿孔は4個確認される。9は口縁部がやや内削り状で、撚糸（R）を縦位に施している。穿孔は8と同様で、遺存する3個の孔のうち、中央には内側器面に穿孔時の土器の胎土が残り、半分ほどが開口している状態である。10は撚糸（R）を押圧したまま回転させずに押し引いて施文した部分と、回転施文した部分が残る。穿孔は施文後の焼成前で3個が遺存する。11は撚糸（R）をやや粗に縦位に施す。穿孔は3個認められるが、そのうちの2個は貫通しておらず、器面の穿孔痕も不整形である。12は縄文（LR）を口縁部に無文部を約2㎝残した下部から縦位に浅く施しており、内面は滑らかに調整されている。穿孔は焼成後で、右上方からなされている。

これらのうち、1は井草式、2～10は夏島式、11,12は稲荷台式の土器である。

4．土製品　（第11図，第１表，図版６）

本遺跡からは、土器片を利用した土製円板が５点出土している。

１から５は、撚糸文期の円板である。１は縁辺をほぼ円形に打ち欠き、よく研磨されている。裏面の中央部に直径３㎜、深さ１㎜ほどの円錐状のくぼみを有する。縄文Lを密に施す。胎土に細砂、石英、長石を多く混入。井草式ないしは夏島式期であろう。２は縁辺の打ち欠きにより整形されている。縄文のRLが浅く施され、条間があいていることから稲荷台式期のものと考えられる。胎土に砂粒、石英、長石等を混入。３は縁辺の一部に欠損がある。縄文RLが施されている。胎土に細砂を混入。やや薄手。夏島式期のものか。４は摩耗が著しく不整形。縁辺は打ち欠きによるが粗い。撚糸Rが浅く施されている。胎土に砂粒を多く混入。裏面はよく研磨されている。稲荷台式期のものか。５は小形品の部類に属する。打ち欠きにより整形。撚糸Rを施す。胎土に細砂を混入。夏島式期のものか。



第11図　土製円板拓影図

	1	2	3	4	5
横（㎜）	43	42	42	33	30
縦（㎜）	42	42	40	35	28
厚（㎜）	7	8	5	8	7

第１表　土製品計測表

5．石　器（第12.13図、第２表、図版６．７）

石器類は総数148点を検出した。そのうち円礫・小円礫が115点で全体の78％を占め、角礫が12点で８％、剥片が10点で７％、石鏃が６点で４％を占める。他に有舌尖頭器、磨製石斧片、打製石斧、磨石・敲石、礫器がそれぞれ１点出土している。出土層位は表土層およびⅡｃ層である。このうちSX－001（縄文早期遺物包含層）からの出土は27点で全体の18％、SX－002（石器等分布範囲）からは13点で同９％の割合を占める。他はグリッド出土遺物である。

これらの石器類の出土地点は縄文早期の撚糸文期の土器の分布範囲と重なることからこの時期に属するものと考えられるが、明確な時期決定は困難である。

有舌尖頭器

1は有舌尖頭器で、風化が激しく、先端部に一部欠損がみられる。粗い調整剥離により整形されている。断面は菱形に近い。

石鏃

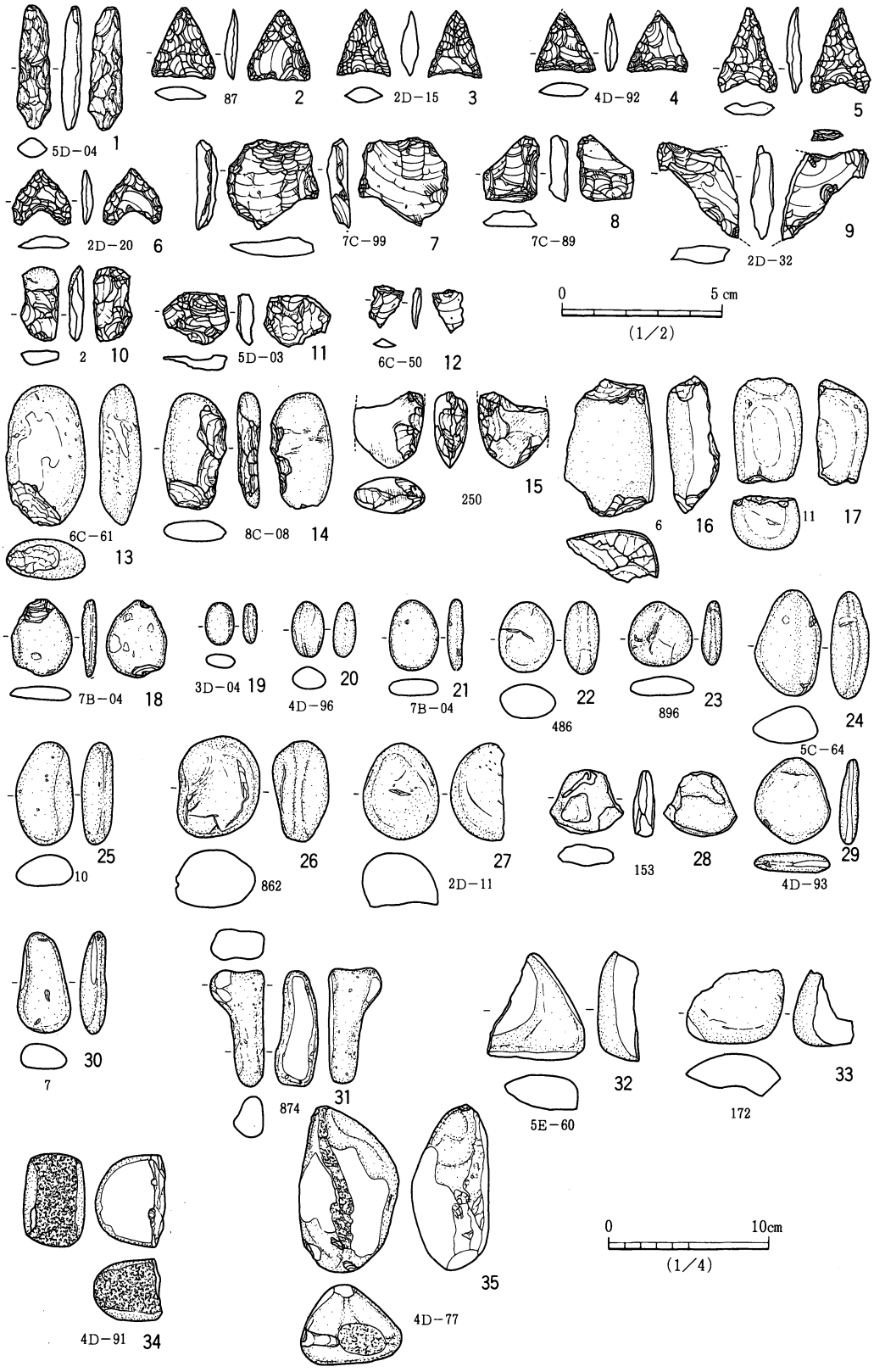
2～6は石鏃である。2は裏面の一部に主剥離面を残し、縁辺に調整剥離を加える。断面は薄手偏平な形状を呈する。3は基部がわずかに内湾する。4は2と同様の調整を施す。5は表裏両面にわたって調整剥離がなされており、基部には両面から抉りが加えられている。これらの石鏃はいずれも側縁部が直線的な形態を有するものである。6は側縁に丸みがあり、基部に抉りを有する。以上5点のうち裏面に主剥離面を残すものが4個体あり、素材剥片の打撃面を横位にして剥片のまわりに調整剥離を加えるという共通した特徴がある。5のみがこれらとは異なり、両面の全体にわたる調整剥離によって整形されている。これは素材剥片の大きさや石質・石材の違いと関連したものであろう。

剥片

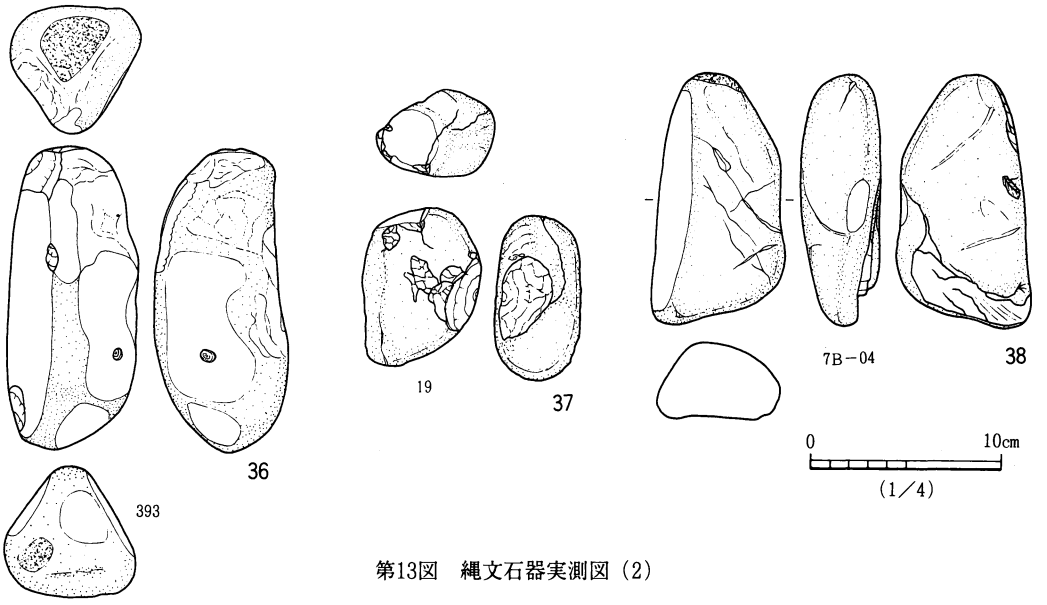
7から12は剥片である。7は剥離された後にバルブを削除しており、打撃面にも調整剥離を加えている。さらに左側縁には両面から剥離が加えられており、稜線は鋸歯状となっている。8は断面形が台形を呈する剥片で、上端が割れている。右側縁に調整剥離痕が認められる。9は少なくとも3片に割れている。10は一部に自然面を残し、円礫から剥離されたことが認められる。11の表裏面には円形に剥脱したような痕跡が残る。12には打撃面が遺存する。

礫器及び円礫

13は楕円形でやや偏平な円礫の一端に打撃を加え、刃部とした片刃の礫器である。刃部先端は鈍角であり、使用によると考えられる摩滅痕がわずかに認められる。14は、一側縁の表面と裏面に打撃を加えて打面を調整した後に交互に剥離を加え、最後に円礫の一端を縦方向からの打撃で剥離し刃部を作出しており、刃部に使用によるとみられる摩滅痕を有する。15は局部磨製石斧で、頸部と刃部の左側半分を欠損している。刃部はその遺存部分からU字状を呈し、曲線的であると想定され、断面形はV字状である。表裏両面とも刃部に対して平行方向の磨痕が残る。16は円礫の一部を利用し上端と下端に打撃を加えて調整している。自然面の残る表面と右側縁部の一部に擦ったような部分があり、光沢がある。全体に被熱しており淡橙色を呈する。17は割れた円礫で、上端部および左側縁に摩滅痕が認められる。18は偏平な円礫の上下端の一部に剥離が加えられる。19、20は小型のやや偏平な円礫である。21は偏平な円礫で、右側縁に細かな敲打による痕跡がある。22は表面の一部が光沢を有するほどに摩滅している。23は偏平な円礫である。使用痕は観察できない。24はやや不整形の円礫で、右側縁の一部にすったような痕跡を残す。25は平坦面と側縁が光沢を有するほどに摩滅している。26,27はともに球形に近い円礫で、27は半分のみ遺存している。28は下端にすったような痕跡がある。石質は砂粒がパ



第12図　縄文時代石器実測図（1）



第13図　縄文石器実測図（2）

図版番号	器　種	石　材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	遺物番号	図版番号	器　種	石　材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	遺物番号
1	有舌尖頭器	安山岩	59 × 16 × 9	6.6	5D－04	20	円　礫	チャート	34 × 20 × 19	13.0	4D－96
2	石　鏃	チャート	22 ×14.5× 4	1.4	SX-001-87	21	円　礫	石英斑岩	42 × 31 × 10	18.9	7B－04
3	石　鏃	チャート	21 × 16 × 5	1.2	2D－15	22	円　礫	チャート	44 × 35 × 21.5	45.6	SX-001-486
4	石　鏃	チャート	18 ×18.5× 4	1.0	4D－92	23	円　礫	メノウ	39.5 × 40 × 13	25.1	SX-001-896
5	石　鏃	凝灰岩	27.5 × 18 × 5	1.2	－01	24	円　礫	安山岩	65 × 42 × 23	79.9	5C－64
6	石　鏃	チャート	17 × 17 × 4	0.9	2D－20	25	円　礫	凝灰岩	63 × 35 × 19	59.3	SX-002-10
7	スクレイパー	黒曜石	41 × 42 × 10	16.2	7C－99	26	円　礫	チャート	62.8 × 51 × 36	150.2	SX-001-862
8	剥　片	黒曜石	31 × 25 × 8	6.7	7D－89	27	円 礫 片	チャート	60 × 48 × 33.5	129.3	2D－11
9	剥　片	チャート	29 × 18 × 7	3.8	2D－32	28	角　礫	安山岩	40 × 46 × 13	30.9	SX-001-153
10	剥　片	チャート	23 × 12 × 5	1.5	SX-002-2	29	円　礫	安山岩	52 × 47 × 11	38.3	4D－93
11	剥　片	頁　岩	16 × 20 × 5	1.3	5D－03	30	磨　石	砂　岩	63 × 34 × 16	45.3	SX－002
12	剥　片	黒曜石	13 × 10 × 2.8	0.2	6C－50	31	磨　石	凝灰岩	71 × 33 × 27	57.3	SX-001-874
13	礫　器	安山岩	87 × 49 × 25	135.7	6C－61	32	円 礫 片	安山岩	67 × 62 × 26	96.2	5E－60
14	打製石斧	緑泥片岩	72 × 40 × 19	58.9	8C－08	33	円 礫 片	泥　岩	46 × 59 × 38.5	88.4	SX-001-172
15	局部磨製石斧	安山岩	46 × 45 × 20	45.5	SX-001-250	34	磨石・敲石	石英斑岩	57 × 43 × 38	137.6	4D－91
16	礫　器	泥　岩	80 × 56 × 31	154.4	SX-002-6	35	磨　石	安山岩	102 × 62 × 48	338.8	4D－97
17	磨　石	石英斑岩	64 ×43.5× 32	134.8	SX-002-11	36	磨　石	凝灰岩	155 × 68 × 68	933.5	SX-001-393
18	円　礫	珪質頁岩	49 × 38 × 9	19.8	7B－04	37	磨石・敲石	安山岩	87 × 63 × 46	312.9	SX-001-019
19	円　礫	チャート	25 × 19 × 8	4.9	3D－04	38	磨　石	安山岩	138 × 68 × 42	512.0	7B－04

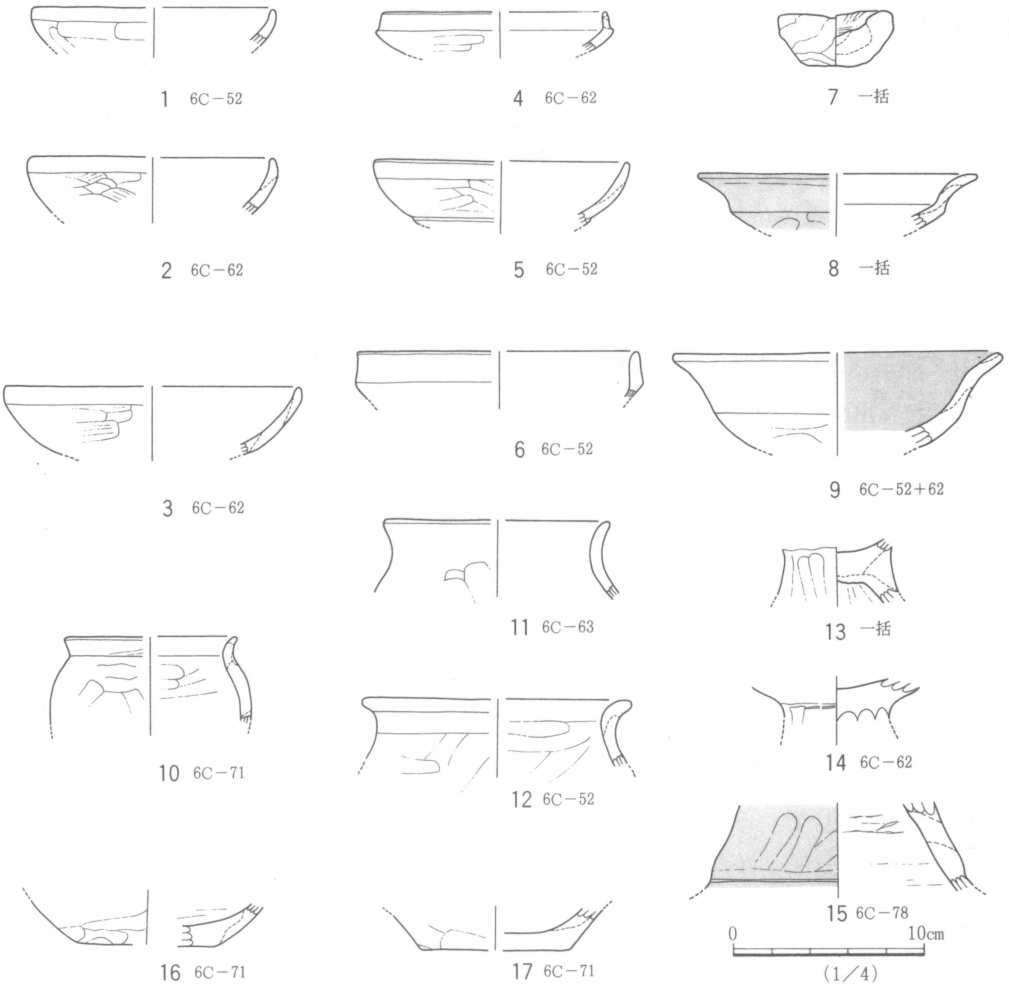
第２表　縄文時代石器属性表

ラパラと剥脱するほど脆い。29は偏平な円礫で側縁部のほぼ全周にわたって光沢を有するほどの摩滅痕が残る。30は29と同様に側縁と平坦面に摩滅痕が残る。31は一端が瘤状に突出した円礫で、突出部および側面に摩滅痕が残る。特に側面に残る摩滅痕は自然面を完全に消失させ、平坦な面を二次的に作り出すまでに著しい。32は側面に摩滅痕が残る円礫片である。33も円礫片で、自然面の一部を除いて内側までかなり被熱している。34は表裏両面には摩滅痕が、側面には敲打痕が残る。35は平坦面には摩滅痕、稜をなす部分には敲打痕が残る。磨石と敲石の用途を共用した礫器である。36はやや細長い円礫で、出土した礫器中では最大のものである。上端の一部に礫面の剥離が２か所みられ、両端には敲打痕が、全面には摩滅痕が顕著に残る。37はかなり被熱しており一部が割れている。表面および割れた面が淡橙色を呈し、風化が激しい。端部に敲打痕をとどめる。38は上端に擦痕、側面に摩滅痕を有する。

(3) 古墳時代（第14図）

古墳時代の遺構の検出はなかったが、後期の遺物が出土した。遺物は土師器のみで、須恵器の出土はみられなかった。遺物の出土は6C－52,62グリッドを中心として、限られた範囲に集中し、1,032点が検出された。検出されたこれらの土師器のうち、7以外は小破片で、わずかに第14図に示したものが推定復元できたもののすべてである。

1～6は坏で、1は口径は推定で12.8cm。調整は口縁部は、横ミガキ、体部はヘラ削りの後にナデを加える。内面にはミガキを加える。胎土に雲母、細砂粒を混入する。色調は外面は茶褐色。内面は茶褐色から淡褐色を呈する。2は口径は推定で13.2cm。調整は口唇部は横ナデ。体部は斜め方向のヘラ削り。内面はナデの後にミガキを加える。焼成は良で、胎土に雲母、細砂粒を混入。色調は外面は茶褐色、内面は赤褐色を呈する。3は口径は推定で15.6cm。調整は口縁部は横ミガキ、体部はヘラケズリの後にナデを加える。内面は丁寧なミガキ。胎土に赤橙色の鉱物と雲母の細片を混入。色調は外面は淡褐色、内面は灰褐色を呈する。内外面に部分的ながら赤彩の痕を残す。焼成は良。4は口径は推定で13.1cm。調整は外面の口縁部は横ナデ。体部は横のヘラケズリの後にナデ、ミガキを加える。内面は横ナデの後にミガキ。胎土は3と同様。内外面ともに黒色処理されている。焼成は良。5は、体部に段を有する坏で、口径は推定で13.6cm。調整は外面は口唇部は丁寧なナデ、体部はヘラケズリ。内面は丁寧なナデ。胎土に赤橙色の鉱物を混入する。6は口径は推定で14.6cm。調整は外面は口唇部は横ナデ。体部はヘラケズリ。内面は丁寧なナデを加える。胎土には砂粒を多く混入。色調は内外面ともに茶褐色。焼成は良。7は手ずくね土器で口径は5.5cm。粘土紐を数本合わせてよじったような粗雑なつくりで、内面はヘラによる整形痕が残り、外面底部にはヘラ状工具による条痕がある。器面は凸凹がはげしい。胎土に赤橙色の鉱物、細砂粒を多く混入。色調は外面は茶褐色、内面は黒褐色。8は高坏の坏部で、口径は推定で14.8cm。調整は外面の口縁部は横ナデ。体部は斜めのヘラケズリ。内面は横ナデ。胎土に白濁した砂粒を混入。外面は赤彩されており、内面は黒色処理されている。焼成は良。9は高坏の坏部で、口径は推定で17.4cm。調整は外面の上半は丁寧な横ナデ、下半はやや斜め方向のヘラケズリ後にナデを加える。胎土に砂粒を多く混入。内面は赤彩されている。色調は外面は赤褐色。二次的な被熱の痕跡を残す。焼成は良。10は甕で、口径は推定で9.0cm。調整は外面は口縁部に横ナデ、体部はケズリの後にナデ。内面はケズリの後にナデ。口縁部にミガキを加える。胎土に赤橙色の鉱物、細砂粒を混入。色調は、外面は黒褐色、内面は灰茶褐色。焼成は良。11は甕で、体部にナデを加える。口径は推定で12.0cm。12は甕で口径は推定で14.3cm。調整は内外面ともナデ。胎土に灰白色の砂を多く混入。色調は外面は赤褐色から灰褐色。内面は口唇部以下は黒褐色。焼成は良で、二次的な被熱が認められる。13～15は高坏の脚部である。15は外面が赤彩されている。16,17は底部で、ともに胎土に砂粒を多く混入する。



第14図　古墳時代遺物実測図

Ⅳ まとめ

菱田梅ノ木遺跡は空港予定地内に所在する遺跡群のうち、No. 6 遺跡、No. 7 遺跡などの遺跡と同様に栗山川の一支流である高谷川の支流の上流域に展開する遺跡である。空港予定地内に所在するこれらの遺跡が太平洋に直接注ぎ込んでいる栗山川水系と利根川水系との分水界に位置するのに対して、菱田梅ノ木遺跡は支谷を異とし、栗山川水系側を意識した遺跡である。それは遺跡内における遺物分布状況が縄文時代にあっては、台地の東側に集中していることでも示されている。また、遺構は陥し穴が1基台地平坦部で検出されたのみであった。本項では調査によって検出された遺物のうち次の3点について述べてまとめとしたい。

1　縄文土器について

縄文土器は3,800点が出土した。そのうち口縁部の破片は351点をかぞえ全体の9％を占め、井草式が44点（13％）、夏島式が242点（74％）、稲荷台式が43点（13％）で、口縁部の出土点数からすれば夏島式土器が本遺跡の主体をなしている。夏島式の縄文と撚糸文の比率は縄文が78点、撚糸文が164点で、これは空港予定地内のNo. 6 遺跡や千葉市東寺山石神遺跡で指適されているのと同様の傾向を示しており、縄文ではRLが量的には多く施文され、撚糸文ではほとんどがRであった。

2　穿孔土器について

穿孔土器は本文でもふれたとおり17点が出土した。これらの土器の特徴をあげると以下のようになる。

① 穿孔には焼成前と焼成後の穿孔がある。焼成前の穿孔は夏島式期に多い。

② 穿孔には不完全で未貫通のものが含まれる。

③ 穿孔は両面からなされるが、主に外面から行われている。

④ 穿孔は口縁部に対してほぼ水平方向になされる。焼成後の穿孔では縦方向に長く穿孔痕が残される傾向が認められ、断面は縦に幅の広いロート状を呈し、穿孔は円形となる。

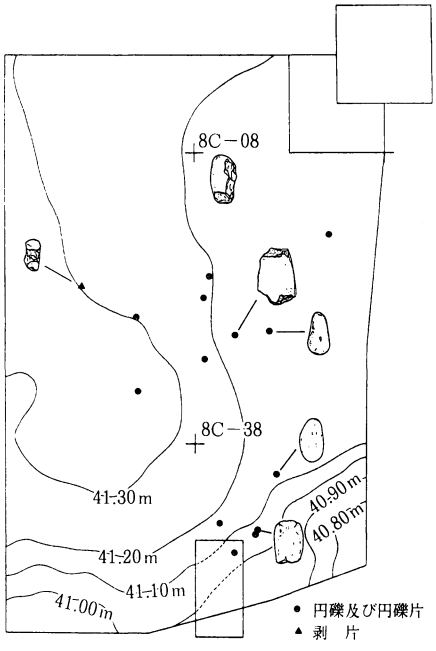
⑤ 穿孔の直径は4㎜ほどである。

⑥ 本報告書に報告した穿孔は、口縁部から穿孔の上端までの間隔が9㎜～18㎜の間にあり、平均値は13.6㎜である。口縁部から穿孔の中心までの数値は平均18㎜である。これらの数値を他の遺跡出土例と比較すると、芝山町に所在する空港No. 7 遺跡B地点出土例（夏島式期）では口縁部から穿孔の上端までの間隔は15㎜,穿孔の中心までは18㎜、A地点例では口縁部から穿孔の上端までの間隔が7㎜と9㎜、穿孔の中心までの間隔が9㎜と16㎜である。船橋市に所在する中野木新山遺跡では3例（稲荷台式期）が報告されており、口縁部から穿孔の上端までの間隔がそれぞれ12㎜,12㎜,10㎜で、穿孔の中心までの間隔はそれぞれ14㎜,16㎜,14㎜であった。このように穿孔部位は、ほぼ口縁から20㎜までの間におさまることになる。

当遺跡における穿孔のある土器については、夏島式期と稲荷台式期に焼成前の穿孔が存在することや、未貫通の例が存在することから、一概にそのすべてが補修孔とは考えられず、さらに焼成前の穿孔例には使用の痕跡や、摩滅痕も認められない等の特徴がある。以上のことから焼成前の穿孔土器については装飾的要素を有するものとしてとらえることもできよう。

3　石器について

石器類は総数148点が出土した。このうち円礫、小円礫、円礫片、角礫、剥片が115点で全体の78%を占めている。このうち円礫片が17点、角礫が12点、剥片が10点,偏平な円礫が6点で他は円礫、小円礫である。他に石鏃が6点出土し全体の4%を占める。この他に有舌尖頭器、打石斧、磨石斧片、磨石が出土した。円礫片のなかには被熱の痕跡を有するものが5点含まれている。



第15図　8Cグリッド石器出土状況図

出土地点は遺物包含層中で27点、4Dグリッドで21点、8Cグリッドで20点、5Dグリッドで18点、6Cグリッドで15点とほぼ土器の出土状況と同様の傾向が認められる。

8Cグリッドの石器類の出土状況は（第15図）、打石斧、円礫、円礫片、剥片等が16m×10mの範囲から13点出土しており出土層位はいずれもソフト・ローム層直上の層中であり、レベルもほぼ同一であった。伴出遺物は夏島式土器が主体をなしていた。これらの石器類を同一時期の所産と考えるならばその伴出遺物から、夏島式期の所産として捉えることもできよう。

参考・引用文献等一覧

白崎高保　「東京稲荷台先史遺跡」　『古代文化』　第十二巻第八号　1941

矢島清作　「東京市杉並区井草の石器時代遺跡」　『古代文化』　第十三巻第九号　1942

江坂輝弥　「稲荷台文化の研究」　『古代文化』　第十三巻第八号　1942

江坂輝弥　「廻転押圧文土器の研究」　『あんとろぽす』　1948

吉田　格　「井草式土器について」　『武蔵野研究』　6・7合併号　1951

西村正衛　「千葉県西の城貝塚」　『石器時代』　第2号　1955

芹沢長介　「神奈川県大丸遺跡の研究」　『駿台史学』　第7号　1956

周東隆一　「撚糸文文化の研究」　『考古学研究』　第7巻第4号　1961

杉原荘介他　『神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚』　明治大学文学部　1962

西村正衛　「千葉県香取郡神崎町西之城遺跡」　『古代』　第四十五・四十六合併号　1965

小林達雄　「縄文早期前半に関する問題」　『多摩ニュータウン遺跡調査報告』Ⅱ　1966

神奈川県教育委員会　『南横浜バイパスNo.1～No.8遺跡』　1973

岡本孝之　「稲荷台文化の展開(1)」　『古代文化』　第二十四巻第一号　1977

岡本孝之　「稲荷台文化の展開(2)」　『古代文化』　第二十四巻第二号　1977

中野木新山遺跡調査団　『中野木新山遺跡』　1977

鈴木道之助　『千葉市東寺山石神遺跡』　（財）千葉県文化財センター　1977

宮　重行・池田大助他　『木の根』　（財）千葉県文化財センター　1981

調布市教育委員会　『調布市深大寺池ノ上遺跡』　1983

西村正衛　『石器時代における利根川下流域の研究』　1984

西川博孝　『No.7遺跡』　（財）千葉県文化財センター　1984

酒々井町教育委員会　『北押し出し遺跡』　1984

（財）千葉県文化財センター　『縄文時代(1)』　房総考古学ライブラリー2　1985

原田昌幸　『撚糸文系土器様式』　1991

報告書抄録

フリガナ	シバヤママチヒシダウメノキイセキ
書名	芝山町菱田梅ノ木遺跡
副書名	菱田梅ノ木地先宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査研究報告
シリーズ番号	第228集
編集者名	岡田誠造
編集機関	財団法人　千葉県文化財センター
所在地	〒284　千葉県四街道市鹿渡809－2
発行年	西暦 1993年 3月31日

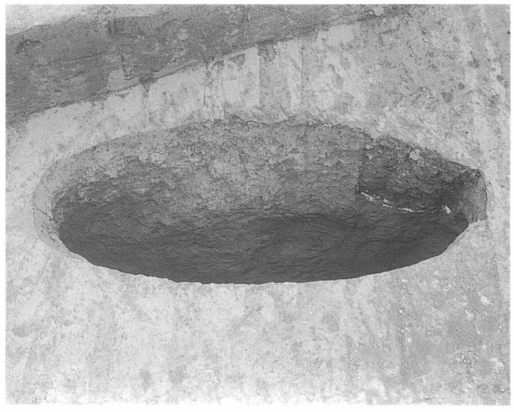
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
ヒシダウメノキ 菱田梅ノ木	サンブグンシバヤママチ 山武郡芝山町 ヒシダウメノキ 菱田梅ノ木471ほか	409	027	35 52 22	140 23 45	19920601 - 19920831	13,000	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
菱田梅ノ木	包蔵地	縄文 古墳	陥穴　1基 縄文遺物包含層　1ヶ所	縄文早期土器 土師器 石鏃 円礫	

写　真　図　版

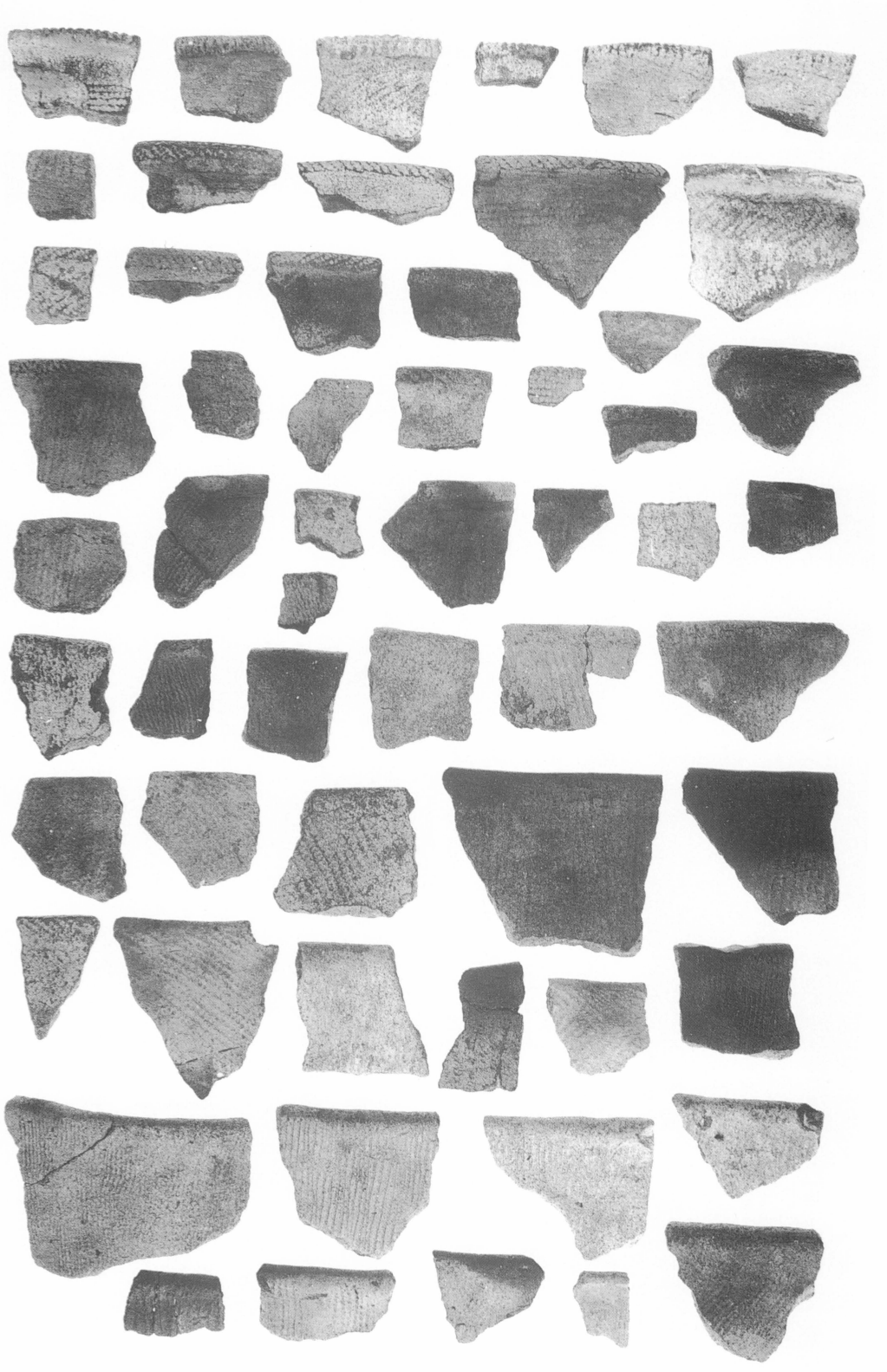
遺跡周辺航空写真

(1) 先土器時代遺物出土状況（北から）

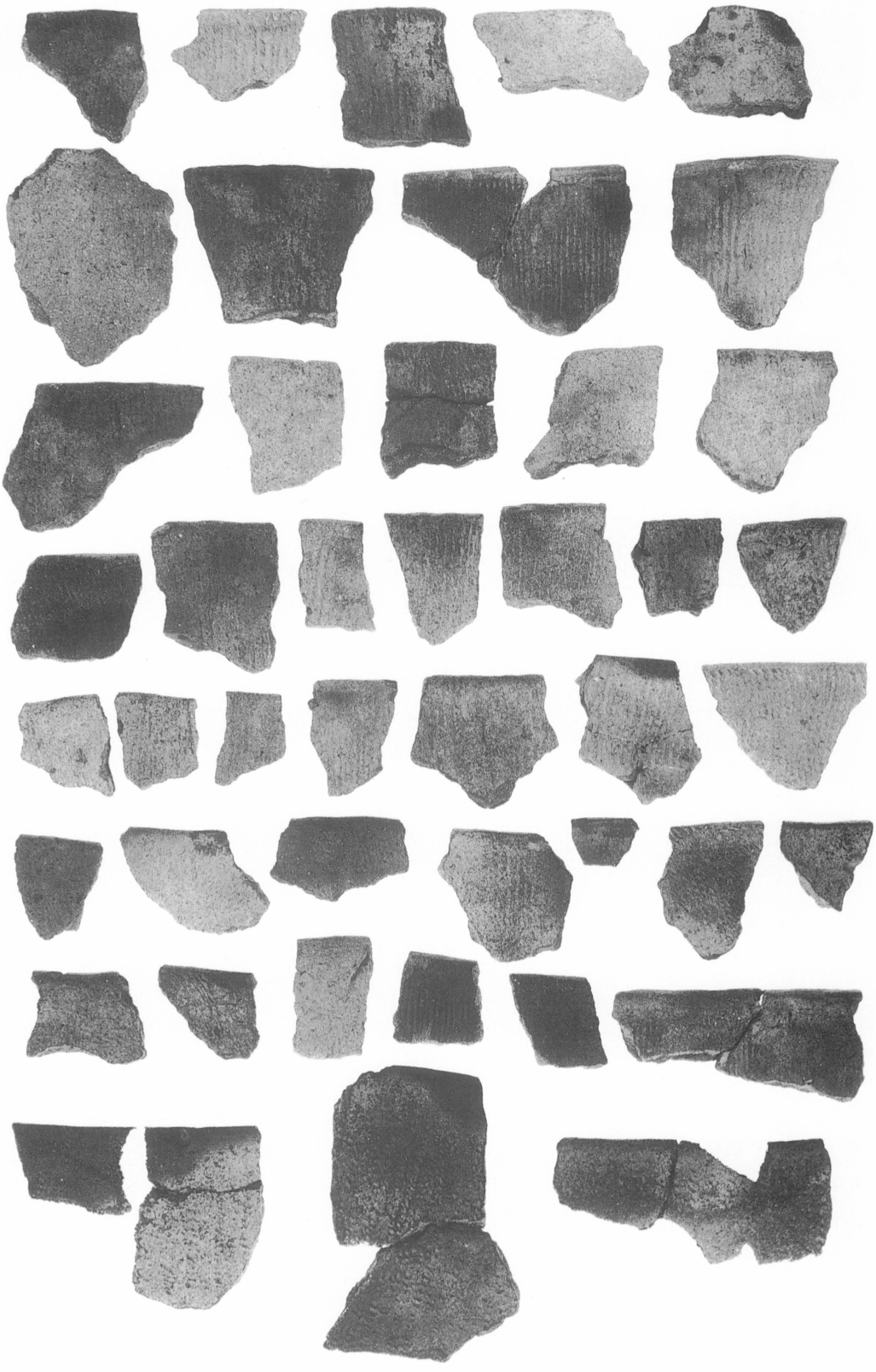


(2) 陥穴全景（南から）

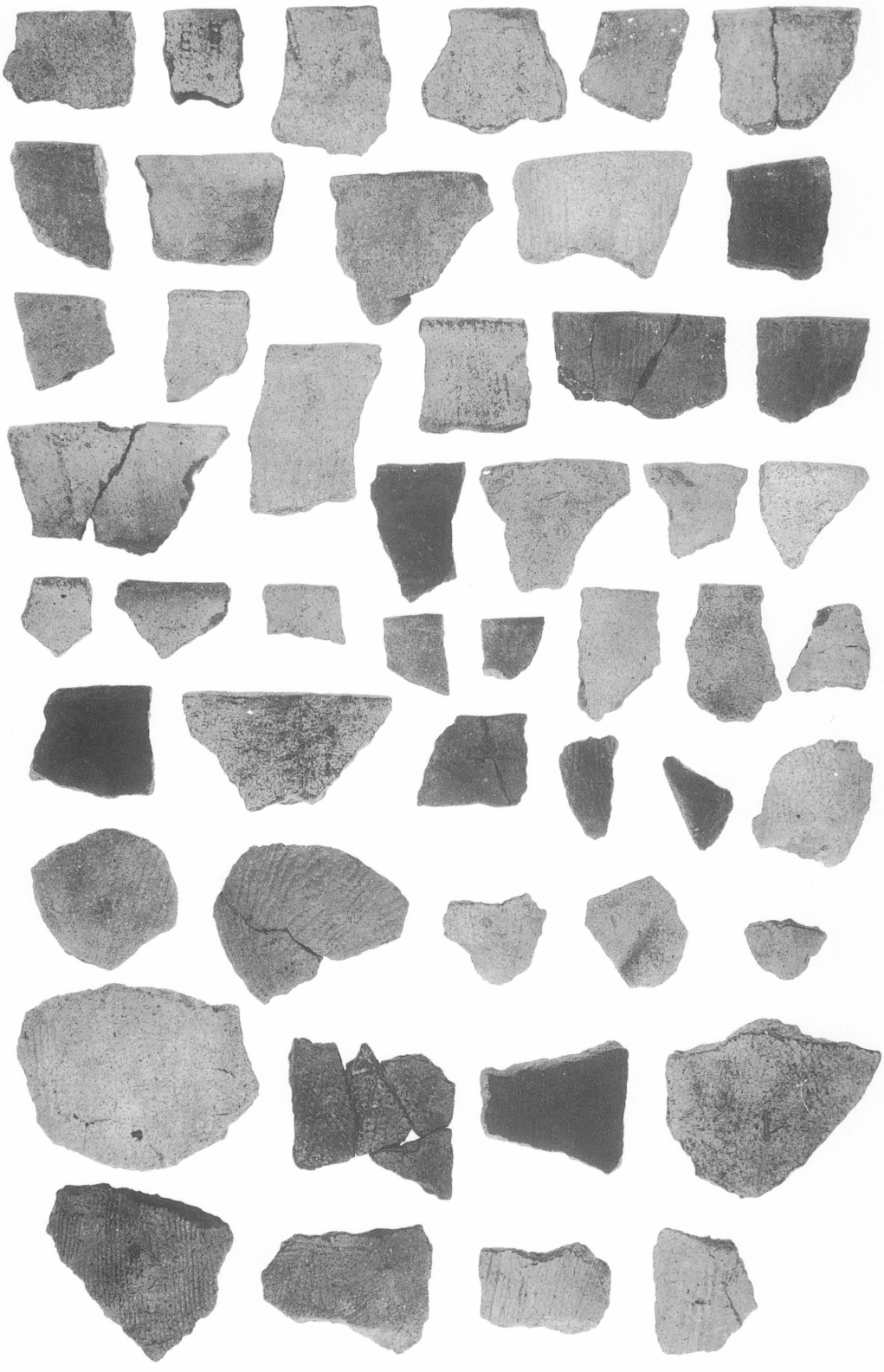
(3) 縄文早期遺物包含層（南から）



縄文土器（1）

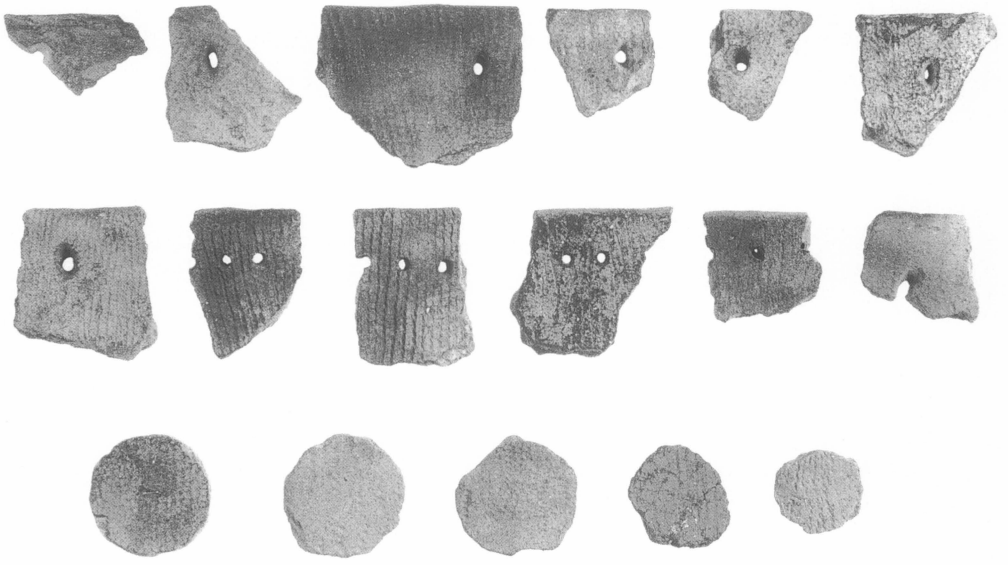


縄文土器（2）



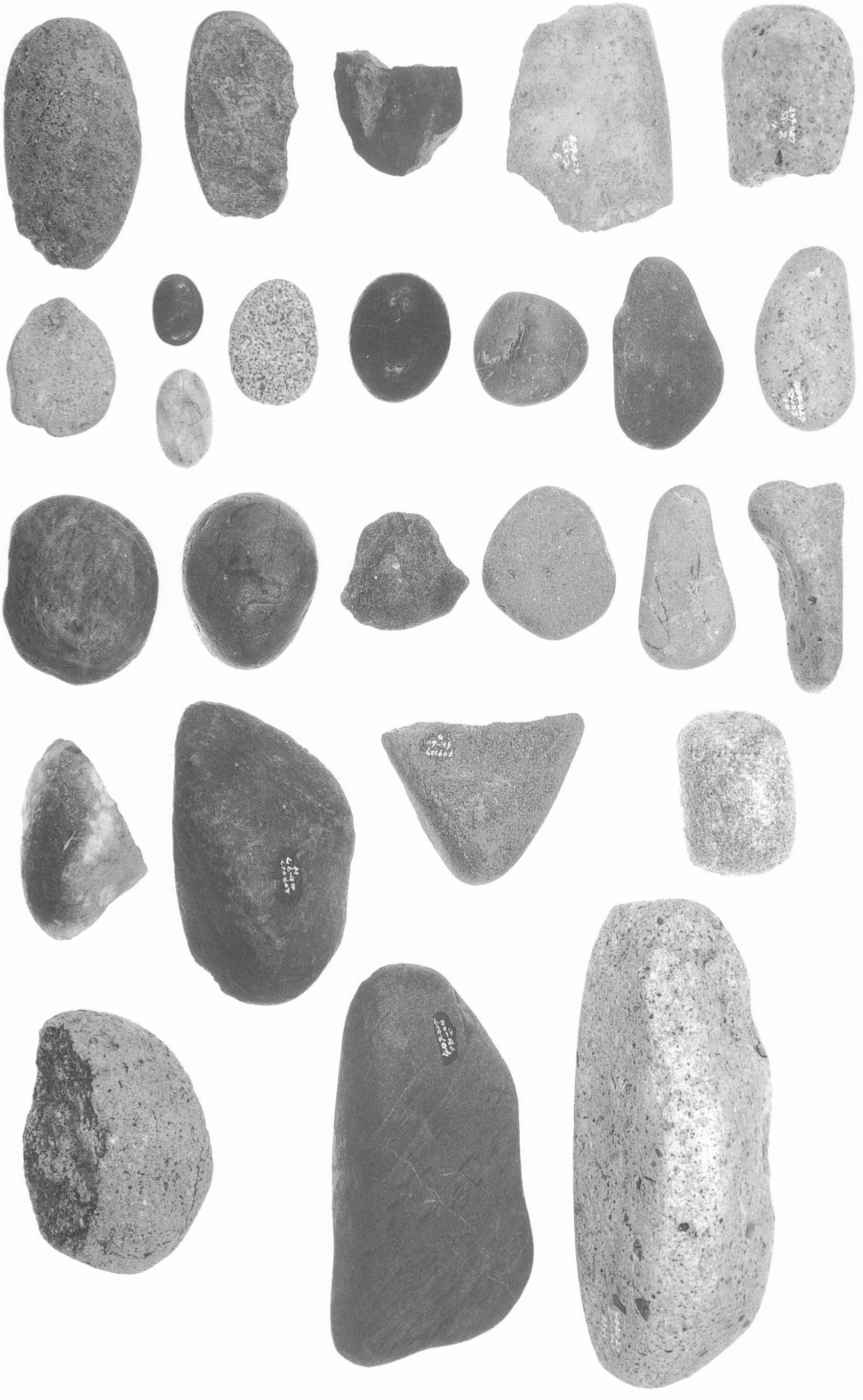
縄文土器（3）

(1) 先土器時代遺物



(2) 縄文穿孔土器及び土製品

(3) 縄文時代石器



縄文時代石器

千葉県文化財センター調査報告第228集

芝山町菱田梅ノ木遺跡

平成５年３月22日　印刷

平成５年３月31日　発行

発行　新東京国際空港公団
東京都中央区日本橋本町２丁目４番地

編集　財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地２

印刷　有限会社ミリオン印刷
千葉市中央区南町３丁目４番地２